

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿 7月12日（金）放送分

テーマ「奄美先人の知恵」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は，毎月第2週に，奄美の文化・暮らしにおける先人の工夫などを紹介する「奄美先人の知恵」の4回目です。

今回は，奄美大島の至る所で見かけることのできる蘇鉄^{そてつ}についての「奄美先人の知恵」を紹介します。

蘇鉄は，約二億年前の中生代に最も栄えていた植物で，地質学や古生物学の研究書には，中生代を「蘇鉄植物時代」ともいうと書かれています。また，奄美大島で身近にある蘇鉄は，中国南部の四川^{しせんしょう}省から，沖縄，奄美，十島^{としま}，三島^{みしま}，屋久島，種子島に自生し，南さつま市坊津^{ぼうのつ}，指宿市山川^{やまがわ}，南大隅町佐多^{さた}，肝付町内之浦^{きもつき}，宮崎県都井岬^{といみさき}の南九州をその北限としています。比較的狭い範囲で，二億年という全く想像もつかない年月を生き続けてきたことを考えると，畏敬^{いけい}の念さえいただきます。

この蘇鉄は，奄美大島の暮らしに広く，深く結びついており，様々なことに利用されてきました。その用途についていくつか紹介しましょう。

一つ目は，食料としての利用です。実（なり）は，毒を取り除いてでんぷんをとり，ご飯・団子・お菓子・餅にしました。また，味噌・しょうゆ・焼酎の原料にもなりました。

二つ目は，燃料としての利用です。与論・沖永良部・喜界島などの山林のない島では，蘇鉄は唯一の燃料として使われました。また，乾燥させて魚を燻^{くんせい}製にする燃料にもしました。

三つ目は，子どもたちの遊び道具の材料としての利用です。葉で作った虫かご，実の殻で作った笛，輪切りにした幹を車の車輪にして遊びました。

その他，土砂の流出・土手の崩壊，潮風や強い風を防ぐために植えたり，水田や畑の肥料として使ったりするなど，奄美での暮らしを支えるために，多くの利用がなされました。

また，約130年前には，奄美大島から多くの蘇鉄がヨーロッパへ輸出されました。クライナー・ヨーゼフの著書『ドイツ人の見た明治の奄美』から，その時の様子を紹介します。

ドイツでは、古くから国王をはじめ、貴族の葬式に椰子の葉が使われていました。しかし、多くの人々がこの習慣の真似をし始めたために椰子の葉が足りなくなりました。そして、よく似ている蘇鉄の葉が注目を浴びるようになり、中部ヨーロッパ、特にドイツで蘇鉄の葉が大量に売れるようになりました。

ドイツの園芸家アルベルト・ワグナーは、明治18年頃に奄美大島に渡り、蘇鉄の木をそのままドイツに輸入して成功を収め、「蘇鉄ワグナー」というあだ名で知られました。その後も、海外からの貿易商人たちによって奄美の蘇鉄の需要はますます高まってきました。しかし、明治30年頃になると、ドイツ政府が蘇鉄に高い輸入税を課したために、蘇鉄の需要が急になくなり、奄美の経済にも大きな影響を与えました。

最後に、旧鹿児島県立図書館奄美分館の初代分館長である島尾敏雄の初期作品集の中から、『ソテツの慈父』という作品を紹介します。

「南の方の島に行くと、嘘のやうに沢山の蘇鉄が丘と言はず谷間といはず埋めつくしてゐる島があるのです。大きさも、松の木のやうに年を経た大きなものや、生れたての赤ん坊の頭位の卵形の茎から透き通った新鮮な柔らかい葉っぱを二つ三つ附けてゐる程の小さなものに至るまで色々な大きさの蘇鉄が所きらはずその島を埋めつくしてゐるのです。船に乗ってその島の近くを通る時には、他の葉よりは黒光りがするものだからまるで不思議なきのこが密生してゐるやうな気がします。（中略）春になると、その蘇鉄たちの若いものには新しい葉っぱがすくすくと芽さながらに出て来ましたし、古いものには巨大な松かさに似た黄色い細長い実と間違ふやうな花が茎の所に咲きました。そしてそれが段々大きくなるとパイナップルのやうに甘い匂ひをぷんぷんふりまくので蜂や蝶々がその蜜を食べに沢山やってくるのです。」

この『ソテツの慈父』は、島の風土と人の心をえがいた短編小説ですが、所々に書かれている蘇鉄は、島尾敏雄が直接見た蘇鉄と、奄美の暮らしとのかかわりを感じさせます。

蘇鉄は、南の島独特の景観を演出する代表的な植物であるといえます。そして、そこに暮らす人々にとっては、毎日の生活の一部であるとも言えます。奄美の自然と暮らしとの関係について考えることで、これまで何気なく見ていたものが、また違って見えてくるかもしれません。そのときに、奄美図書館の図書も参考にいただけると幸いです。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。